「選挙タイム」のおしゃべりが 仲間ふやしに!!

数年ぶりの班会で 班が元気に

埼玉・上福岡支部かすみ班

会えるのを待っていた

かすみ班は、委員会からの「班会開こう」とのよびかけに、計画を立てては都合が悪くなって流れてしまう、を繰り返してきました。5月の班会日程を決めたとの連絡を受け、今度こそと担当常任委員も参加し、5年ぶりの班会が実現。当日は「会えるのを待ってた」と、昨年入会した人から会員歴60年の人まで会員12人中7人が参加。90歳の会員から「仲間と一緒に子育てをしてきて、昔は三ケタの班だったのよ。病気もしたけれど今は元気」と、まずは自己紹介と近況報告。

しんぶんタイムは、記事のストレッチをしてリフレッシュ！ 選挙タイムでは「シールアンケート」をしました。「あなたの願いは？」との問いに、居酒屋経営の会員は「消費税減税、インボイス廃止」、美と平和担当は「世界平和」、他の人も「消費税減税と原発」「自給率アップ」「軍事費はなく税金は暮らしに」シールを貼りながら、思いを語り合いました。

かすみ班６月班会で高校生の描いた原爆の絵を見て「これが本当にあったことなんだよね」と交流

「選挙が近いけど…」

するとある会員から「選挙が近いけどどの政党に入れるか、どう判断しているの？」と質問が出されました。17常任のMさんが5月号1面「個人的なこと」は政治的なこと」の「低所得者ほど重い消費税」の表を示して、「こういう紙面を参考にみんなでおしゃべりすればいいんじゃない？」と話しました。

その後、ハンドマッサージでリラックスして、6月の班会の日程も決めました。終了後、班長が「実は政治の話をするのは躊躇があった。今回、みんなで話ができてすごくよかった。こういう話をみんなもしたかったんだと感じた」と語りました。

楽しかった班会に今度はゲストを誘おうと、つながりに声をかけ仲間ふやしにも足を踏み出しています。

ランチ班会&選挙タイムで仲間を迎えて

東京・府中支部わかくさ班

わかくさ班では、会員が高齢化するなか、毎月の班会を定例化し、毎回しんぶんタイムもしています。班ニュースを作成し、次回の班会の日程を知らせるなど、みんなが班活動に参加できるように工夫しています。

「新しい仲間を迎えたいね」と6月11日は、ゲストを誘ってのランチ班会を企画。地域のSNS学習会に参加していた知人など3人に声をかけると、60代の方がゲスト参加しました。手づくりランチ後の選挙タイムでは、6月7日号「消費税減税すぐに！ どうなってる？ 各政党の主張」でおしゃべり。「生活支援で一番効果があるのは2万円の給付でなく消費税減税だよね」「東京都は水道基本料金が4カ月間、無料になってうれしい。さらに共産党が言っている水道料金10％引き下げもしてほしい」など、都議選や国政の話で盛り上がりました。ゲストが「料理がおいしく楽しかった」と入会し、みんな大喜び、もっと早く声をかければよかったと話しています。

今回参加できなかった人からも、「誘ってくれてありがとう」「その日はどうしても都合がつかないけど、また誘ってね」との返答に、再び元気をもらいました。

主張

軍事か平和か、日本の岐路 参議院選挙で選ぶ

7月3日公示、20日投開票の参議院選挙が始まりました。

新婦人しんぶんでは、「個人的なことは政治的なこと」と、選挙紙面を連続して掲載してきました。

長引く物価高、米の高騰、高い学費、上がらない賃金、低い年金…節約ももう限界。その上、参院選後には、医薬品の保険外しや〝防衛増税〟も狙われています。

新婦人はこの間、国会行動を重ね、審議を傍聴してきました。選択的夫婦別姓の国会審議では、自民、維新、参政、保守の国会議員が選択的別姓に反対し、「困っている人はいない」「日本の伝統の戸籍制度が壊れる」というデマや、女性差別撤廃委員会からの勧告を〝外圧〟と日本が批准している国際条約を否定するなど、古い価値観に固執し、法改正を求める足を引っぱり続けました。

参政党は、参院選の公約に「日本人ファースト」という排外主義的な政策を発表。しかし、生きづらい日本社会の原因は、「外国人優遇」にあるのではなく、自公政権が長年続けてきた財界・大企業優先の政治にこそあります。

新婦人しんぶんを使って、モヤモヤをおしゃべりし、「オーガニックなど、部分的に支持できることで投票先を決めたら危ない」「『外国の留学生が優遇されて日本の学生が苦労するなんておかしい』と知人に言われた。でもおかしいのは学費無償化に背を向けてきた自民党政治では？」など、どこでも対話が広がっています。

私たちの願いを託せる政党を見極め、自民党やその補完勢力を少数に追い込んでいきましょう。

元中央委員　森田啓子さん死去

新日本婦人の会元中央委員の森田啓子さんが4月26日に死去。88歳でした。森田さんは、高知市支部事務局長、県本部事務局長、会長を歴任。1982年～94年まで中央委員を務めました。

（4）

「満州国」鞍山（あんざん）は小さい町ですが、当時東洋一と言われた製鉄所があり、米軍のB－29（爆撃機）による空襲が始まりました。空襲警報が鳴ると、日本軍の飛行機が飛び立ち、空に煙幕を張ります。見えなくなった町には、思わぬ所に爆弾が落ちて、住民は怖い思いをします。いつも昼前に来るので、食べる物を用意して公園に掘った防空壕（ごう）に走っていきました。近くに爆弾が落ちると、ズシーンという音と赤い炎が上がり、地面が揺れます。防空壕の壁土がザザーっと崩れる音とともに、B－29の轟音（ごうおん）は今も忘れることができません。

1944年、5歳の頃、大連（だいれん）に引っ越しました。パリを模してロシアが作った海辺の美しい町で、アカシアやネムノキの街路樹がありました。わが家は父が勤める会社の近くで、周囲には中国人の家がたくさんあり、〝泣き女〟がいる葬式や花いっぱいの花嫁行列を見物しました。食べ物は乏しく、コーリャン、粟、大豆カスなどが主食でした。父は中国人と親しくしていて、たまには鶏やウサギなどを分けてもらい、ぶら下げて帰ったり、海へ魚を釣りに行ったりしていました。

軍服を着て。3歳の宝迫さん

終戦まで1カ月を切った1945年7月に弟が生まれ、命名で父母は毎日もめていました。神風を信じる父は「勝利」を主張、母は外国人にも呼びやすい「波浪（ハロー）」を提案し、父は「お前は非国民だ」と怒鳴りました。

つづく